

芥川だより

発行日 * 2024年11月1日 e-mail: ab_87968624@yahoo.co.jp

最新号から創刊号まで閲覧できます。 <http://akutagawadayori.sakura.ne.jp/>

編集 川口 伸

発行人 下村嘉明

〒661-0951

尼崎市田能5-3-10-601

☎090-8796-8624

***** 一部200円です *****

バナナのアイス



今年最も有難かった食べ物は、バナナを押しつぶしたバナナのアイス。ラップで包み冷凍室に入れておくと一日で硬いバナナのアイスクャンディーができる。私は、甘いアイスクリームが好きで毎日のように食べていたが、医者から血糖値が高いと言われていたので、家内がネットで探して作ってくれたバナナのアイスを食べたときに、これはイケる、と暇さえあれば食べるようになった。売れ残りのバナナをスーパーでたくさん買ってきて押しつぶしてラップで包み重ねて冷凍庫に入れておく。朝晩、何個か食べるが飽きない。適度な甘さで美味しい。

夏場、猛暑の中での仕事は熱中症になりやすいと思い、ポカリスウェットを毎日5本ほど飲み続けた。これも血糖値を上げた要因と考えたので、ポカリはすべてやめてほうじ茶を家内に入れてもらい冷凍した。酒はプリンゼロ、糖質ゼロの焼酎だから問題はないと勝手に棚上げする。

3か月に一度の検査で私の目論見通り血糖値は少し下がったので医者も安心した様子だった。私は食べすぎ飲みすぎの癖が治らず今も続いている。適度なバランス感覚が欠けているのだ。しかし、医者から強く言われると、私なりに妥協点を探す。糖尿病の怖さはよく知っている。阪大に入院した相部屋の3人とも糖尿病のリピーターだった。酒の飲みすぎで糖尿病になったのは一人で他2人は、遺伝性と突発性だった。酒の飲み過ぎで糖尿病になるのは一部の人なんだ。酒で糖尿病になった彼は、ドライバーだったが朝から飲んで仕事をしていたという。恐ろしい車が昼間から走っていると言う。飲酒運転はなかなかなくなるはずだ。

医食同源と言われるように、飲食するものの良し悪しと適量が重要だ。私の遺伝子には過去の飢餓状態が強く刷り込まれ、食べられるときは食べ、飲める時には飲め、というDNAが強い影響力を持っているのだろう。しかし、私の知性は、諸々の欲を調整し妥協点を見出す。その一つがバナナのアイスかもしれない。

死をめぐるあれやこれ(119) 石川 吾郎

消費税を廃止すべき理由

この十月の総選挙では、政治と金の問題が焦点とされたが、消費税の税率低減ないし廃止も主張された。これを主張する政党が議席を増やしたものが多かった。例えば国民民主、れいわ、参政、など。これらの党はいずれも議席を大幅に増やした(共産は議席を減らしたが)。立憲民主は消費税増税勢力が主流派になっていくようだ。◆消費税が、国民の消費に対して「懲罰」の意味をもち、その結果私たち国民の消費にブレーキをかける働きをもっていることはだれも否定できない。実際これまで消費税率は段階的に引き上げられてきたが、その度に国民の消費は弱くなり、デフレ傾向を促進し国民の貧困化が進行してきた。加えて消費税率をあげる度に、同規模の法人税率を下げたのはもう有名な事実だ。つまり社会保障の財源として自公政府が位置づけていた消費税は、実は法人税減税の補填とされてきたのが真相。◆しかし消費税はさらに罪深い役割をはたしている。国民の実質賃金が低下して三十年間貧困化をしてきた大きな理由の一つが、雇用が正規雇用から非正規雇用に移って代わり拡大されてきたことにあることはよく知られている。これは労働力を流動化して、賃金を低く抑えることを主な目的としている(ちなみにこれは小泉進次郎氏の主張でもある。彼は総裁選で「労働力の流動化」を叫んでいた。彼を応援する人はこのような政策に賛成していること

になる。むろん中には非正規の働き方を望む人もいるだろうが、身分や経済的な安定を求めて正規雇用を求めめる人が圧倒的に多数だろう。◆税制上では正規雇用の人件費には消費税がかかるのに対して、非正規の人件費に対しては消費税がかからないという仕組みになっている。企業は節税のため正規雇用をできるかぎり減らして、非正規雇用を拡大していくという方策をとることが理にかなうことになる。したがって消費税の存在するかぎり企業には非正規の節税効果は続くし、消費税率が高いほど節税効果は高い。このことが非正規雇用が拡大してきた大きな要因になっている。つまり消費税が存続するかぎり、経済的安定を求めて正規雇用を求める人たちの願いはかなえられないことになるわけだ。消費税を廃止すれば非正規雇用が節税になることはなくなる。表から裏から国民を貧困と不幸に追いやる消費税は、廃止すべき理由である。



芥川だより二二四号 目次

巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム119	石川吾郎	1
素老人☆よもだ帳 128	坂本一光	2
哲學家の時事放談78	祖蔵哲	3
大峰奥駈道84	下村嘉明	6
ボケ老人の雑話	明石幸次郎	7
その7		
オクラの山たより98	因了生	8
隠された歴史73	満田正賢	11
俳句	影山武司	13
編集後記	S K 生	13
ふみの道草76	山椒魚	14

素老人☆よもだ帳 (128)

坂本一光

◆言葉で表現するということ

最近、言葉で表現することについて考えさせられる二つの文章に出合った。一つは、大阪で発行されている『川柳わかくさ』十月号に掲載の【常男モノローグ7】である。「未来はきつと火がついたブリクラ」などの句がある暮田真名の発言を引用して以下のように言う。

朝日新聞八月二十八日に「現代川柳作家」暮田真名さんが「現代川柳」について語っている。現代川柳の定義らしきものとして、①意思疎通という役割から離して言葉を使う、②普通から零れ落ちて行こうとするものを向けて詠むことが特徴という。またメッセージを込めないし共感も求めないところがいいという。

②はともかくとして①は言葉の機能を無視あるいは言葉そのものを無視するものとして賛成できない。またメッセージを込めないとするが、メッセージに共感するからこそ人と人との関係が成り立ったり、成り立たなかったりするのはないだろうか。川柳にメッセージがあったからこそ、鶴彬は殺されたのだ。意思疎通という機能を果たさない、あるいはメッセージがないのはもはや言葉ではない。暮田氏の言う「現代川柳」は空虚な言葉遊びとしか言いようがないと思うが…。

もう一つは、これも朝日新聞十月二十日掲載の谷川俊太郎の詩である。氏の書き下ろしの詩を毎月一回掲載する『どこからか言葉が』のコーナーに載った「思うだけ」という詩である。

思うだけ

手に入れたとは思わなかった

触れたいと思わなかった

ただそこにあると思っていた

見えなくていい聞こえなくていい

でも確かにあると思っていた

なんと呼べばいいかわからなかった

言葉にしようとする

世界にまぎれる

だが消え去ることはなかった

動くでもなく静止するでもなく

時空に浮いていたそれを

無いと言うことはできなかったが

在ると言う

なくなってしまうそうで

言葉がもどかかった

言葉でいうことができなかつたから

ただ心で思っていた

書くのをやめて窓を開けた

空気が動いて匂いが入ってきた

走って行く子どもの声をした

思うだけでいい…

と思った

言葉がもどかしく、言葉にできないものは確かにある。その時は書くのをやめればいいのだ。書くのをやめて窓を開け、思うだけでいい、と言う詩人に倣いたい。(かたちは心であり、心はかたちになる■大分の素老人)

「哲学命い」の時事放談(78)

祖蔵 哲

「ポリクライシスの哲学」

現在の時事ニュースで最大の関心はアメリカ大統領選挙であろう。むしろイスラエル、ウクライナ戦争はまだ先が見えない。しかし、どちらにも深く関係しているのがアメリカの政治動向である。ご存じのように投票は日本時間の今月11月6日に行われる。しかし、アメリカ大陸は広い。郵便投票などの開票もあり結果が出るのは時間がかかる。さらに問題なのはその集計方法でのトラブルである。今回もすでに郵便投票箱が数か所で放火されているし、例の如くトランプ陣営からの根拠のない不正クレームもある。結果を待つてから本号を書き終わろうと思っていたがどうもまだかかりそうだ。しかし、いずれが勝利しても問題は残りそうだ。トランプが負ければ、前回の如く「選挙が盗まれた」といって暴動を扇動するかもしれないし、勝てば現政府の關係者に容赦のない復讐をするだろう。もう完全に分断されたアメリカは何が起こってもおかしくはない。このようなアメリカの近い将来を映画にしたのが、日本でやっと公開された「シビルウォー」だ。文字通り「市民内戦」、アメリカでは「南北戦争」を意味する。私も鑑賞したが、数年前なら完全にSF映画であったら

うが、現在ではむしろリアルであり戦慄が走った。アメリカを模倣する日本で暮らしているからであろう。

これらの昨今の世界の混乱に関連し、昨年の世界経済フォーラム(ダボス会議)で発表された「ポリクライシス(複合危機)」という言葉が気になった。現在と将来のリスクが、相互に作用して「ポリクライシス」を形成し、この複合的な影響を伴う連関するグローバルリスクの集合体であり、その結果、複合的な影響が各リスクの総和を超えるという。具体的には、気候変動と自然災害、天然資源の不足、生物多様性の喪失、健康、経済、紛争、サイバー犯罪といった個々のリスクが同時多発的に生じると、その間で相互作用が生まれ、危機が増幅されるということだ。この結果、国家間の対立は深まり、国内では格差の増幅により分断が起きる。まさに現代「人新世」のことである。

(1) 「真実への無関心」の相対主義

先月号では、なぜ世界が内戦や戦争、飢餓、難民、格差、など異常状態が日常化されて人々はそれに「慣れ」てしまったのかということを哲学した。そして、それは「真実への無関心」であることが分かった。ではなぜそうなるのかも考えられる。「真実」とは「普遍的なもの」「絶対的なもの」である。そうするとこれは「普遍的絶対的なものへの無関心」とな

る。それは「相対主義」と呼ばれる。「みんな違ってそれでいい」、どこかで聞いたような言葉だ。一見耳障りの良いこの言葉が世界を「無関心社会」に向かわせる。

近代が招いた「神の死」つまり「絶対的普遍的なもの喪失」は現代社会の病として今でも引きずっているのである。

しかも、判断の基礎となる「事実」そのものが意図的に作り出されるのが現在の病理的状況である。「オルタナティブ・ファクト」は「もう一つの真実」と訳されるが、先のトランプ政権の時に、既成メディア批判として使われた。すなわち、彼ら「オルタナ右翼」の事実が当面の真実であるという主張である。

(2) 「陰謀論」

近代の病「神の不在」が現代の病でもあるといえ、そこからは神に代わる者「陰謀論」も出てくる。

K・ポパーは『社会の陰謀論』で、陰謀論はかつて世界のあらゆる出来事が

「神の意図」によって説明されていたものが「世俗化」されていると見なす。古くは「フリーメーソン」や「イルミナティ」、現代ではまた、あのトランプの「Qアノン」である。陰謀論が根強いのはその反論にたいして「循環論法」で答えるからだ。陰謀の証拠があれば見つかれば、それが陰謀の存在とされ、その証拠がみつかなければ、それこそが「陰謀」であるというものである。そして、陰謀論

はすべての悪しきまた見つからない異常や不整合を探し出してそれを自然科学であれば「仮説」とするものを「陰謀」とする。

しかし、「陰謀論」がすべて間違っているものとは限らない。いわゆる「スノーデン事件」、米国家安全保障局(NSA)がテロ対策として極秘に大量の個人情報盗聴により収集していたことを、元NSA外部契約社員のエドワード・スノーデンが暴露した事件だ。この事件、最初は単なる「陰謀論」として扱われたが、実際の証拠が持ち出され現在も行われているサイバー攻撃の実態を明らかにした功績を残している。

しかし、そうかといって「陰謀論」がすべて正しいわけではない。なにが「正しい」かの判定には自然科学で行われているような利害関係のない専門集団による「査定」、そして一般人である我々のコモン・センスによる「評価」が必要である。

(3) 「真実」とは何か

「真実」とは「確かなもの」である。ではその「確かさ」はだれが判断するのだろうか。デカルトは『我思う故に我あり』といっている。私が見るもの、聞くものはすべて疑える。けれども疑えないものはそう考えているこの私だけだ。この明証性から始めようといった。これは「不可謬主義」

とよばれ非常に主観的で厳しい見方である。最初から「真実」が確定している数学のような演繹的な世界ではよいが。真実が未知であり確定的でない、方法帰納的自然科学ではむしろ「可謬主義」をとっており疑える余地があるものだけが科学的真実であるとしている。

(4) 他者の「証言」

デカルトの確信は自分が考えたものだけが正しいという「独我論」に陥りやすい。そこで私たちは通常、他者の意見を聞く。では他者の意見「証言」も本当に信じてよいのか。これには、その証言者の過去での発言が多くの場合事実と一致していたかどうかと決められるように思える。しかし、実際上はすべての事柄を確かめることはできないし、それをまた間接的に他者に聞いても正しさは保証できない。だから私たちは通常、他者の意見を参考に自分自身で考えることにしている。この当たり前のことは近代になつてからのことであり、これが「啓蒙」である。啓蒙主義者の代表カントは「自分自身の悟性を用いる勇氣をもて」という言葉で近代を啓いた。さて、他者の証言の真実性を見極めるのポイントの一つ目は「一致条件」であったが、二つ目のポイントは「誠実さ」である。これはバーソナリティに属することであるが重要である。そして最後のポイントが「判断能力」である。その他者がその事実判定

に関して特別の知識があるのかどうかを重要になる。

さて、これまでの他者は現実の社会での事柄であったが、現在の別の社会空間「ネット社会」での他者の証言はどうであろうか。先ほどの現実社会、リアル空間での真実性の判定ポイントを適応すると「一致条件」は満たされにくい。それはネット社会での「匿名」の問題である。ここには「人格の同一性」も保証できない。この「人格の同一性」こそJ・ロックが示した行為の責任を帰属させる主体を特定するためにあるものであるが、これが保証できないと責任を負う義務はないことになる。だから、ネット空間は「無責任空間」となるのだ。同時に「誠実性」も保証できない。

「表現の自由」を盾に好き勝手な発言することは許されない。一般に他者の証言や意見は公共の利益を目的とするという価値があるから「誠実性」「真実性」を持つのである。しかし、ネット空間にはリアル社会以上に別の目的を「動機」とする証言が多い。その動機とはプロパガンダなどの「政治的動機」、おとり広告やSNSなどでの閲覧数を稼ぐ目的などの「経済的動機」、そして単なる悪ふざけなどの「快樂動機」である。しかし、それらも制限がある。それがJ・S・ミルの「他者危害の原則」である。個人が健康に悪いとされるタバコを吸う自由（愚行権）は守らなければならないが、

それは他社に不利益を及ぼさない限りである。

(5) 「証言」意見「伝達媒体(メディア)の変遷

昔の情報伝達は人と人が直接あつて口伝えて伝達されていた。それが印刷、通信技術の発達により書籍、新聞、ラジオ、テレビなど多くの「メディア」が出現した。時空間を超えて情報をより多くの人に届けられるようになった。「マスメディア」が「マスコミュニケーション」を可能にしたのである。「マスメディア」は数ある情報の中で何を伝えるべきなのかを選別をする「フィルター」としての役割である。ではなぜその「フィルター」が信用できるのかであるが、それは職業ジャーナリストとしての「信用」や「専門性」である。彼らには「自己利益」でなく「真理追及」へのインセンティブが働いている。そして外的には業界としての倫理規定もある。しかし、時には誤情報も流れる。だからマスコミは信じられない」ということになるが、「可謬主義」の立場にたてばそれだけでメディアが信じられないということにはならないが、その頻度が目安にもなる。そして、「マスメディア」には対立する意見に対して情報伝達の公平性も求められている。それはかつてのラジオ、テレビなどの電波メディアのストリーム数が技術的に限られており公的機関が割り当てをする必要があ

ったからでもある。日本では現在、放送法第4条において「政治的公平原則」が明記されている。しかしアメリカにおいては1987年にこの『フェアネス・ドクトリン』が廃止された。その理由が「表現の自由」である。これがそのままではまるのが今日の「インターネットメディア」の登場である。

(6) インターネットのフィルタリング

「マスメディア」なきインターネットはもはや「フィルター」が存在しない自由な世界と考えられる。しかし、これは大きな誤りである。インターネットは確かに自由な世界であるが、それは「悪」にとつても自由であること意味する。資本主義社会は「欲望」によつてつくられるというが、その欲望が再生産されそれが利益を生み続ける社会でもある。普段ネット検索をしているときによく気づくが、表示される結果は過去の検索履歴や購買情報などから特定のアルゴリズムを備えたエンジンによつて優先的に選ばれる。この結果、自分の好ましい情報だけに触れることになり、ますます「欲望」は膨らむ。これを「フィルターバブル」という。同じような現象に「エコーチェンバー」がある。これはSNSなどで自分と同じような意見が跳ね返ってくる状態のことである。この状況は自分のもっている偏見(バイアス)をますます強化する。これは「確認バイアス」と呼ばれている。

自分の考えが正しいかどうかを確かめる際に自分の考えを支持する(「確証する」)証拠ばかりを探してしまい「やっぱり」と安心する心理傾向のことである。

このようにインターネットに組み込まれている「フィルター」は従来のマスメディアのように「見えない」し「選べない」。そしてますます「孤立化」する。

(7) 「世論」の形成

従来のマスメディアの世界と今日のネット社会で作られる「世論」に違いはあるのだろうか。その前にそもそも「世論」とは何か。

世論の定義については議論があるが、一般的には政治や社会問題に関する世間の意見を指す。そして読み方も「よろん」「せろん」と二種類ある。そもそもそれらは「輿論」と「世論」という別々の概念であった。前者は理性的な議論に基づいた意見であり、後者は国民の感情からくる意見として区別されていた。そしてそれを現代のネット社会に当てはめるとまさしくそれは「世論」であろう。しかし、ネットが現れる以前からもこの「世論」は巧妙に操作され意図的に作られていた経緯もある。それが、W・リップマンのいう「ステレオタイプ」である。情緒的なステレオタイプは事実に対して「見てから定義」しないで「定義してから見る」。輿論を形成するマスメディアに対して世論を形成するネットのフィルタ

ーはますます事実から離れてバブル化する。そして意見は互いに交換されることなく、対立は「分断」になる。

(8) 操作される世論と監視社会

東西冷戦が崩壊した時期を同じくしインターネットが広まった、そしてそれは新しい、連帯、のメディアとして希望をもって迎えられた。しかしその「春」は一瞬の間に過ぎ去った。このようにインターネットが登場した初期には過剰な期待があった。それが現在のカオスに似た状態に変化し、真の世論とは逆の方向に偏っていく。イギリスでの「ED 離脱」、そして今再び問われている「トランプ現象」の例である。

その要因の一つが「ビッグデータ」である。個人データはインターネットの、新しい石油、デジタル社会の「通貨」と言われている。個人の嗜好や関心、行動様式や思想が集められ、そしてその数が大きくなればなるほど傾向性や心理動向そして行動予測の精度が向上する。この方法により今度は逆に個人の心理操作や行動誘導が行われるのである。この手法は個人の商品の購買で「マイクロターゲット広告」として利用されている。選挙で勝敗のカギをにぎるのが少数の浮動票である。この少数を個別の傾向に従って誘導するのに利用されるのがこの手法である。また、「ネガティブ広告」も「選挙」での投票誘導を可能にしている。

「ビッグデータ」を分析しその利用プログラムを開発しているのが「E ニューリッチ」と呼ばれる「E ベンチャー企業」の裕福層の経営者達である。彼らは開発資金を調達するためにファンドや不動産投資会社との関係を重視する。有名な投資会社ルネッサンス・テクノロジー社は天才的数学者や物理学者による新たなアルゴリズム・プログラム開発により莫大な利益を得ている。この流れにいたるのがトランプや E・マスクなどである。さらに「ビッグテック」と呼ばれるインターネット大手メディア、Meta、Google、X などのオーナーもこれらに含まれる。

つまり、世論は彼らに意志により簡単に誘導されるのである。さらにネットの世界は今や完全にバーチャル化している。バーチャルとは「仮想現実」のこと。ネット世界での「個人」は現実の個人と一致しない。それを可能にするのが「bot:ボット」である。「ボット」とは、ネットを介して自動化された作業を実行するソフトウェアであり、人間の行動を模倣する。つまり、仮想の個人がフリーメールによってアカウントを作り、さまざまな意見を SNS に書き込むのを自動化する、「仮想個人作成アプリ」である。これは現実に販売されている。もちろん「悪用」が可能である。さらに複雑で高度な「ボット」が世論操作にかわれている。

従来の監視社会は苦勞して個人情報

収集した。しかし、現代人は自主的に個人の情報をネットに提供する。それを誘導し、監視するのは容易である。現代は新たな「テクノロジー監視社会」に入っている。

(9) ニューロテクノロジー

少し前、コロナ禍に世界が見舞われていた時に、反ワクチン運動の一つとして「ワクチンにマイクロチップが埋め込まれて人間は操作される。」という噂を聞いたことがあるだろう。これ自体は「フエークニュース」として考えられるが、この技術は現実である。

すでに去年から国連は、また規制がかかっていない AI チップの脳内埋め込みによるニューロテクノロジーに対して、精神的なプライバシーに深刻なリスクがあると警告している。

しかし、アメリカでは5月に米国食品医薬品局 (FDA) から人体実験の許可を受けたイーロン・マスクの会社「ニューラルリンク」がこのシステムを実用化に向けて研究中である。

さらに危険なのは「ブレインテック」と呼ばれる「脳波」と「AI」による「脳の見える化」である。従来より、絶対に他者が知りえないのは「内面の聖域」「心のプライバシー」(「私秘性」)だとされてきた。しかし、これもこの技術により疑わしくなってきた。さらに、この技術が可能になれば、他者の脳、意識に侵入が可

きるようになる。これらの技術はもちろん現在、脳神経障害者や身体的ハンディキャップを持つ人を対象に研究されているのであるが、「悪用」も可能である。一方で、入出力装置（デバイス）の開発も進んでいる、ウェアラブルから電磁波へ。これも悪用すれば、SFの世界での「マインド・コントロール」ならぬ「ブレイン・コントロール」が可能になる。

むろんこれらの開発にたいして、国連などの機関は危機感をもっているが現状では規制、法制化するには至っていない。現在の「自由」の概念、「思想、信条の自由」「表現の自由」などは、もつとそれら形成する根源的な自由の立場「認知の自由」から見直さなければならぬ時期に来ている。

(10) デジタル時代の民主主義

デジタル時代の民主主義は大きな課題を抱えている。「アテンション・エコノミー」の概念は、情報の質よりも人々の「関心」や注目を集めることが経済的利益につながることを優先している。何が「事実」か、それが「真実」かどうかの「真理」への判断への「関心」はどんどん薄れさせられている。そのような状況では逆に「マスメディア」の役割が再びもためられ、個人では「リテラシー」（読解能力・判断能力）の必要性が高まっている。マスメディアに求められるのはその専門性である。「真実」を導く情報のフィルタ

リング機能を確実に果たせるのは、より客観的な「真理」を追求している「自然科学」の手法であろう。その一つが「査読制度」である。一つの専門分野の論文が他の専門分野から批評される制度である。さらに必要なのが裁判で行われている「陪審制度」である。これは逆に専門家ではない者が専門家を審査するのである。そして基本的な「倫理綱領」と同時に、これらの過程が公開されていることが求められる。

昨今のポピュリズムの台頭は、大衆迎合主義を助長し、異論を認めない反多元主義的な風潮を生んでいる。これにより、国民投票のような直接民主主義の手法が感情的な反応や誤情報に基づいて行われる危険性が高まっている。特に、ファクトチェックの関心の低さ、その無力さが際立つ中で、確証バイアスが人々の判断を歪め、誤った情報が広がる懸念されている。このようなデジタル時代において、民主主義を守るためには、メディアリテラシーの向上が不可欠である。市民が情報を批判的に評価し、真実を見極める力を持つことが、健全な民主主義の基盤となる。デジタル環境での情報の流通を理解し、適切に対処することも必要だ。しかし、個人や特定の市民での抗議には限界がある、そこで必要なのは規制である。だが、これは現在の「真理なき世界」にあつて「自由」との対比に基づいて全体的合意や一致は非常に困難

である。

最後に再び映画「シビルウォー」に戻る。『テキサスとカリフォルニアの同盟からなる西部勢力』と政府軍の間で内戦は、各地で激しい武力衝突が繰り広げられ、ついに反乱軍は大統領官邸を包囲する。その中で「国民の皆さん、我々は歴史的勝利に近づいている——」と権威主義的な大統領はテレビ演説で力強く訴えるが。』

この映画のように規制を強化すると「権威主義」になる。なんとも複雑な現実世界である。

大峯奥駈道 (84)

下村 嘉明

体験型人間学 34

戸数が多いマンションの大規模修繕工事は何かと大変だ。特に現場事務所の監督は、精神的にやられてしまう。トラブルの多い作業員とのやり取り、居住者からの絶え間ない苦情に堪え切れられずうつ病になり突然、退社してしまう。何とも言えない現実がある。

特に、若くて意気揚々としているよう

な監督は、3ヶ月もすればおかしくなる。現場事務所には、元受けの所長、一次下請けの監督などがいて、人間関係もバラバラ、利害関係もバラバラで複雑な空間だ。

私が、仕事をした現場では突然監督が来なくなつて、朝礼でも何の説明もなく誰も不思議に思っていたが、しばらくしてうつ病で家に閉じこもつたままだという。ずいぶん偉そうに振舞っていたが、突然心が折れてしまったのだろう。会社も辞めてこれからの人生どうするんだろう。

同じような監督がいた、精神的な問題ありと考える監督に私はいじめられた。仕事が終わつても余計な仕事を言いつけ威張っていた。ありがとうの言葉もなく無言の態度を見てこの人は精神的な病だと感じていた。やはり私の予感通り病で退社しなくなったと聞いた。

ある日突然、大きな現場の監督を任せられたら精神的プレッシャーが相当なものだろう。特に、居住者からの苦情に悩まされると寝られなくなるのだろう。ある大手ゼネコンは、苦情の多さに呆れて大規模修繕事業からは撤退した。

ボケ老人の雑記(その7)

明石 幸次郎

私のようなボケかけ、少し眼も耳も悪くなりして来ている老人が、ボランティアの電話相談で見知らない人の悩み、精神的な苦しみ、経済的困難などで死にたい、のしんどい、辛い思いなどの話を聴き、相手に寄りそい、共感することで、少しは何か役に立ったのではと思いい、悩みなからこの秋でもう10年が経ちました。

「誰かのために何かをすることが、自分の人生を虚しく思わないようにする最善の道だ」と、かの柳田邦男さんが言われましたが、見ず知らずの電話の掛け手との関係の中で、この10年、振り返れば自分の存在、来し方を見直すことに繋がっている電話が何回かあります。

ある時、電話相談を終了して談話室で休憩していた私に「お疲れさん」と言いながら微笑み掛けて「どうですか?」とやさしく尋ねてくれる女性相談員がいました。「しんどいですね。余り、掛け手から長いこと聞いてくれてありがとうと言って貰える電話はありませんね! 今日もそうでした」と言う。「そうですよ! 年に何回かあれば、良い方ですよ。況して、こちらに配慮して最後にありがとうと言ってくれることはめったにないですよ。」「失礼ですが、何年位やらられてるんですか?」という質問に対し「はっはっ

はー。もう30年も経ちましたのよ。

本当にね。長いわねー時々ね、今言いましたように、年に何回かね、本当にありがとうと言って貰える電話がありません。それがあるので30年近くも続いたと思いますわ」と言われた。女性に歳を聞くのとは思いますが、「もう私、80歳を越しましたわ。何か人様のお役に立てばと思いいながら続けてますが、それが、結局は自分の支えになってるんですかね? よく分かりませんが、人様のためと言いいながらも、自分が色んなことを学ばせてもらっているんですよ。この歳になると分かるんですよ? 家族、身内とか自分のためのだけの生活もつまらないものですよ。まあ、無理をせずにおやりになることです」と言われ「お疲れさんでした。お先に失礼させていただきます」とごく自然に言って談話室から出て行かれました。80過ぎのおばあさんとは、思えない立ち姿に何か爽やかさ、女性特有の母性的なやさしさ、柔らかい信念と持続力? みたいなものを感じ、こういう人達でこの電話相談のボランティアは50年間も続けて来られたんだと気づかされました。

話は変わりますが、以前30年以上い会社でトップまでいったDさんから(コロナ以前は何人かでの人を囲んで飲み会をやっていました)携帯に電話があり今日は阪神の試合がないから、今、ええか?」と言うことで、「どうされまし

たか?」と聞くと「あのな、俺も癌を患

ったり足も悪くなりして、最近梅田まで出て行くのがしんどくなったのでなあ、話がしたので阪急T駅まで出て来てくれへんか? Tホテルでご馳走するのになあ。まあ、忙しいと思うがなあ!」「そうですね、私が一人でお邪魔するのもなんですので、S君も仕事を止めて完全にリタイヤしたと聞いてますので、誘って行きますわ。私も聴くというボランティアをしていますので、いくらでも面白い話?なら聞かせて下さい」と言って後日、Dさんのお気に入りの二歳下の君を誘って、Tホテルで昼食を取りながら、話を聞きました。まあ、ちよつと飲みながらと言うことで、私はビール、Tさんは日本酒で、S君は身体の事情でノンアルコールでと飲談をしました。話は他愛のない阪神タイガーズは9月からが勝負やと岡田監督は言ってるみたいやでとか、会社の過去の首脳陣の裏話とか、以前のDさんの懇親会に出て来ていた人の近況はどうやとか、まあ、会社関係、関西財界がらみの話、私が人事本部長に何故か嫌われてたとか(道理で出世しなかった訳が分かったが、なぜ、話もしたことのない偉い人に嫌われたのか理由は分からないが)家族の話などで、ほぼ3時間の飲談のうち9割くらいはDさんが話をされていたが、この人の人徳か自慢ばなしの様には聞こえず、S君も私も聞き役に徹していました。日本酒を2合足らず飲

まれ、話も充分されたと思われたところで又、やろか!」と言うことでお開きになりました。帰路につき、S君に飲談の感想を尋ねたら「まあ、お互い昔の話を面白、おかしく言ったり聞いたりして、まあ、ほとんど聞いていましたが、Dさん、お元氣そうでしたね」「いやいや電話では、俺もいつ倒れて逝ってしまうかもわからんからなあ」と言ったら「そんな、明石さん、我々の方が先にボケてしまい、逝ってしまうかも分かりません!でも、会社で偉くなった人ほど段々と人が寄り付かなくなり寂しいかも知れませぬね」「そうやなあ、偉くなった人ほど、周りからあれこれされるのに慣れてしまってるし、社長を退かれてから、尋ねるて行ったら、俺が社長を退き相談役になったが、誰も俺の処に相談に来ないわ。だれも相談に来てくれない相談役は歴代で俺だけやないか! 君くらいや、会社を早期に辞めると報告に来てくれたのは! これは、相談やないかと笑っておられたが、その後も財界がらみで色々な要職に就かれたので、あれこれと人が寄って来て、存在感はあったんと違うか。その後やなあ、完全にリタイヤされてから、ぼちぼちと寂しいと思われてきたのは? しかし、あれだけ、よく人の名前と日にちなどを記憶されているのは、まだまだ、お元氣や、ホンマに我々の方が早く逝ってしまうなあ」と言いいながら帰宅しまし

たが、なぜか、名実共に位を極めたDさんに、ボランテアの談話室で一言二言喋っただけの同じくらいの年齢のおばあさんに感じた爽やかさとか、心からの元気を感ぜず、今日の懇談で気が少しは紛れたが、日常的に寂しいのではという余計な？ 気持ちだけが残りしました。

オクラの山たより (98)

困了生

一

樋口一葉の学歴は十二歳で上野元黒門町私立青海学校小学高等科第四級を首席で卒業したところで終わっています。

あと一年半で無事に小学高等科をおそらくは非常に優秀な成績で修了するはずでした。これを阻んだのは母親のたきです。女子に学問は不要というのです。一葉の学才に大きな可能性を感じていた父親の則義はそれに強く反対し家族の中で一悶着おきました。そのときの騒動を一葉自身は日記の中で次のように書いています。

十二といふとし学校をやめけるが、そは母君の意見にて、女子にな

かく学問をさせなんは行く行くのためよろしからず。針仕事にても学ばせ、家事の見習ひなどさせんとてなりき。父君はしかるべからず。なお今しばしと争ひ給へり。

この母親たきの言葉で少し驚くのは女に学問は益なしと言っているのではなく、有害であるとまで言いきっていることです。女性が長く学問するのは将来のためによくはないのだ、と。

一葉はまだ十一歳です。しかも高等科全四級のうちの最初の級が終わったところでたきは中退させると言っているのです。さらに娘は首席であり、これで退学するのはもったいないと考えた父親・則義は「今しばらく」と粘り、妻の意志が強いと見ると一葉に「汝(おまえ)が思ふところは如何に」と尋ねます。

汝が思うふところは如何にと問ひ給ひしものから、なお生まれ得てこころ弱き身にていづ方にもいづ方にも定かなることいひ難く、死ぬばかり悲しかりしかど学校は止めになりにつけり。

母親と父親の板挟みになって「死ぬばかりに悲し」と思いつつ、生まれつき「心弱き身」のために、はっきりとした返事をせぬまま、一葉は結局は退学することになっていきました。

それにしても母親のたきはなぜ女性の学問は将来のためには有害であると言ったのでしょうか。

父親の則義は泉太郎や虎之助という二人の兄を超える一葉の学才を惜しいと思ひ、女性も学問をすることで世に出る道があると考えたかもしれません。しかし、母親のたきは逆に首席を取るような娘の将来をかなり危ぶんだに違いありません。女子の学問は女としての将来の幸せを妨げるに違いない、と。

今から考えるとビックリするような考え方ですが、このたきの考え方は当時では極めて常識的なものでした。

明治十年代の半ばでは女子の小学校就学率はまだ五割を大きく下回っていました。いまの女子の大学進学率が五割を超えているとすれば、半年とはいえ高等科まで一葉が進んだことは現在の女子大生よりも高学歴だと言えなくはありません。しかし、いくら高学歴だとしても当時の日本にはそれを生かす場所はどこにもありませんでした。学問よりはまず裁縫や他の家事を身につけさせることが大事だと思ふのは、あくまでも娘の幸せを祈つてのことだったのです。

身重の身体で故郷を捨てて自分とともに江戸(東京)までついてきてくれ、まったく見知らぬ土地で頑張り、今まで樋口の家を盛り立ててくれた妻の主張に対して夫の則義は自分の主張を最後までしきれなかったのでしょうか。一葉は十二月二

十三日に青海学校小学高等科第四級を卒業し、翌年の一月五日から裁縫の稽古に通い始めることとなります。ただし、父の則義は娘をかわいそうに思い多くの書物を買ひ与えました。十歳になる前から書物のある倉庫の中で恐ろしい速さで本を読んでいた一葉です。一日の家事や裁縫が終わったあと夜ごと文机に向って書物を読む毎日となりました。この独学で蓄えられた学識はたいしたものであり、

のちに作家活動の傍らで女子師範学校に勤める幾人かの女性に日本古典を講ずるほどでした。当時の最高の知識を学び得た女性たちに「源氏物語」を講じたりや和歌を行ったりしているのですから、作家として世に出始めていたとはいえ、たいしたものだと言わざるをえません。

その講義を聴いた一人に戦前の東京女子大学の学長となった安井てつ(学長であったのは1923年から1940年まで)がいます。

二

安井てつ(1870～1945)は下総国旧古河藩の武士の娘として生まれました。一葉より二歳年長です。一八九〇(明治二三年)に女子高等師範学校(お茶の水女子大学の前身。安井てつは第一期生でした)を卒業し、母校の付属小学校で訓導(教師)をしていました。一葉の日記に安井てつの名が最初に見えるのは一八九五(明治二八)年四月一八日からのこと。

週に一度くらい一葉のもとにてつは通つたようです。つは一葉にかなりの好感を持つていたらしく、一葉に「松嶋の硯」を送つたり岩手から学校に届いたばかりの大きなリンゴを持参したり的心づかいを見せています。このつはの人の柄について一葉は次のように日記に記しています。

常は口重に世辞など数々なき人なれど、心にしみてうれしと思ふ事あれば、かく取りわきての事などもすめり。可愛き人の心よと母も妹も等しくいふ。

一八九六(明治二九)年、安井つは文部省留学生としてイギリスに渡ります。三年後に帰国したつはは、その後、新渡戸稲造とともに東京女子大学の設立に参加し、新渡戸が国際連盟に去つたあと学長となります。

昭和初年に行われた共産党への弾圧で卒業生ばかりでなく在学生の伊藤千代子からも検挙されましたが、つははその学生たちを深く思いやり、差し入れなどの救援活動をしました。また、戦時中も当局から敵性語であるからと英語専攻部の廃止を強く求められましたが、安井つはが強く反対し戦争の中でも女子大から英語を学ぶ声は絶えませんでした。

くり返しますが、この安井つはが小學校高等科中退の樋口一葉の「教子」で

した。一葉の才能と彼女の独学のすさまじさには驚かされます。

三

一八八三(明治一六)年、泣く泣く小學校高等科を中退してから一葉は母親の言うとおりに裁縫などを習いに行つていましたが、一葉の夜毎の勉強ぶりを見かねた父親の則義は動きはじめます。知人の医師遠田澄庵の紹介により一葉を中島歌子の歌塾「萩の舎」に入門させることにしたので。一八八六(明治一九)年八月のことでした。

この年に小學校令が公布され小學校の義務教育制がされましたが、一葉はすでに一四歳であり、この義務化からは外れました。もともと娘に学問をさせることに母親が許さなかつたので、歌の塾というのは折衷案であつたのでしょう。學校での学問とは違つて、歌塾では書道や和歌を詠むことが教えられ、これは良家の御嬢様たちに必須の資質と思われていました。

一葉が望んでいた男性のように世に出るための学問とは違いますが、それでも一葉は学べるという喜びにあふれて小石川安藤坂にある萩の舎の門をくぐつてきました。

中島歌子(1844~1903)は小石川安藤坂で水戸藩の定宿を営んでいた中島又左衛門の次女で一八歳の時に水戸藩士と結婚しましたが、夫を天狗党の乱で失い、

その後、歌人で国学者の加藤千浪(1810~1877)に師事して和歌や書道を習い、旧派の歌人として名を知られるようになりました。千浪は明治十年に没しましたが、その前後から歌塾を開き萩の舎と称しました。歌子は宮中の御歌所の歌人であつた高橋正風たちとかなり親交があり、その関係でいわゆる上流家庭の女性が多く萩の舎に入門しました。一葉が入門した一八八六(明治十九)年はその最盛期で門下生は一時千余人を数えたとい

います。このころの樋口家は長男の泉太郎を病気の療養をしながらも明治法律學校に通わすなど、まだ貧困状態とはいへませんでした。しかし、萩の舎には梨本宮妃伊都子(いっこ)、旧加賀藩の前田侯爵夫人朗子(ささこ)、旧佐賀藩の鍋島侯爵夫人栄子(ながこ)という皇族や華族の夫人・令嬢をはじめとして上流階級の子女たちがたくさんいました。田舎から上京し、本郷赤門前に二〇〇坪余の家屋敷を持つた父・樋口則義の才覚はたいしたものですが、その真向かいにある旧前田家上屋敷は一〇万四〇〇〇坪ありました。どうにもならぬ差があつたわけです。多くの令嬢たちがいた萩の舎は見るもの聞くものすべてが一葉にとつてはほとんど異文化の世界のものでした。

しかし、そこはさすがに一葉、入門してすぐの頃から一葉はその才気をほとばしらせていました。お茶くみをしていた

ときに、皿にデザインとして書かれていた「清風徐来水波不起(清風おもむるに來たつて水波起こらず)」という蘇軾の「赤壁賦」の続きを頼まれもしないのにスラスラと暗誦し始め、周囲を鼻白ませるといつたこともしていました。その場に居合わせた萩の舎の先輩のうちに一葉のライバルともなる三宅花圃(田辺龍子)がこのときのことを次のように記しています。

(連れの夫人が皿に「赤壁賦」が書いてあるのに気づいて私にいうと、ちようどお茶くみの夏子(一葉)がやつてきて、それを聞き)その(皿)にかいてあつた)赤壁の賦のあとの文句を、茶をつぎながらペラペラと読み始めたじゃありませんか。ちよつと気取つた風をして……。なにせよ其の頃の夏子は才気があふれて止められぬと申すやうな風でした。

三宅花圃「女文豪が活躍の面影」より

この三宅花圃の言葉には少しばかり悪意も感じられますが、それはさておき入門直後の一四歳の一葉はあふれる才気を押しとどめられないほど澆刺とした毎日を送つていたようです。しかし、後には「ものつつみの君」という綽名が付けられるほどの引つ込み思案になつてしまいました。それには一つの出来事がありました。入門して翌年の癸亥(年の初めの歌会の

ことに向けて秋の舎の塾生のあいだではその日に何を着ていこうかと話で持ちきりとなりました。華族、貴族、高級官僚、豪商の子女たちであるので当たり前のように豪華な着物を着てくるという話が飛びかいました。晴れ着を持たない一葉は何を着ていくか迷います。そんな娘の様子を見かねて父親が用意してくれたのが古びた緞子の帯一筋となえばみた黄八丈の着物。緞子は高級織物ですが黄八丈は町娘の着物でした。父親としては大奮発したものでしたが、武家奉公に出たことのある母親は発会というものがどのようなものかよく知っていたので「そんなところへ行くのにこんな着物では恥ずかしい」と出るのに反対します。しかし、父親の心づくしが嬉しかった一葉は出ることになりました。発会に参加した時の気持ちを一葉は一六歳で書いた日記「身のふる衣 まきのいち」に次のように書かれています。

（発会の会場に来てまわりの人々を見渡すと参加する人地の着物は）
げにや善尽くし美つくしたる絹のもやう、帯の色がやくばかりに引きつくり給ふ。……いとどはづかしとは思ひ侍れど、この人々の綾錦着たまひしよりは、わが古ころもこそなかなかいたらちねの親の恵みとそぞろうれしかりき。

一葉が味わった屈辱と士族の娘だという気概が入り交じった記述です。この日の発会で入門半年の一葉は最高点をとりました。それは大いに一葉の自尊心を満足させるものだったのでしよう。しかし、萩の舎という場は一葉のプライドを高め一方で傷つける場所でした。稽古日には萩の舎の前には多くの黒塗りの家紋入りの人力車が御嬢様方の帰りを待っていました。一葉は三〇分以上かけて徒歩で通っていたのです。

萩の舎に通う弟子の中で田中みの子（1857～1920 谷中町の有力者の妻、一葉が出会ったときはすでに未亡人であり、萩の舎では目立つ美人であった）と伊東夏子（1822～1946 日本橋の富裕な商人の娘、母親の延（のぶ）も萩の舎の塾生だった）の二人だけは平民で一葉とともに「平民組」を自称していました。帰る道の方も同じで気が合うこともあり、後年までこの三人組は仲が良く、特に伊東夏子とは名が同じ「夏子」であったということもあって「伊夏ちゃん」「ヒ夏ちゃん」と呼び合う生涯の友となりました。「平民組」とはいえ一葉だけは士族であり、この「平民組」の中では少しばかり一葉もプライドを保つことができたかもしれませぬ。

ふだんはそれでやっていけたのです。が、発会という年初の晴れの場では皇族、華族の子女たちは本気で美をつくして絢爛を競おうとしました。そのとき改めて一葉はこうした人々とは住むが違うのだ

ということを思い知らされるのです。もちろん一葉一四歳の頃の樋口家は父親が来客に銀の延べ棒を見せびらかし、娘の一葉が「あさましい」と不愉快に思うくらいに資産はありました。しかし、萩の舎に来る金持ちたちは段違いでした。一葉はこれをどう感じたのでしょうか。

四

先回、述べたように長男泉太郎の病氣療養は徐々に樋口家の家計を追いつめていきます。多くの資産を傾けたかいいもなく一八八七（明治二〇）年十二月二十七日、享年二十三で泉太郎は亡くなります。樋口家の戸主となる次男虎之助はすでに籍を離れていたため、父・則義を後見人として十五歳の一葉が樋口家の戸主となりました。戸主が決まっても樋口家にはもはや銀の延べ棒はおろか蓄えも底をつき始めていました。すでに退職していた統義には勤め先はなく、女性の妻や娘にもこれという働き先はありません。唯一の働き手である泉太郎を失った則義は一つの決心をします。「恒産なくして恒心なし」。戸主となった娘のためにしっかりとした「恒産」を立てねばならぬ。そのため事業を興そうと。父・則義は東京に人口がもどろつつあるばかりでなく、工業化が進み、物流が激しくなりつつある東京に目を付けます。そうだ荷馬車輸送の組合を作ろう。思いつくが早いのか、則義は動き始めます。まず、その資金の

ためにそれまで住んでいた西黒門町の家を売り払います。そのため借家住いとなりました。かつて本郷に二〇〇坪以上の家を持っていた一葉の一家はこの後、二度と土地を持つことはありませんでした。それはなぜか。実はこのあと則義の事業はすべて失敗したからです。

一八八八（明治二十二年）六月、荷車請負業組合は東京府の認可を受けることができませんでした。事務総代となった則義は開業資金を出し、さらに組合に一〇〇円（今のおよそ三〇〇万円）の貸付けもします。そして、組合事務所の近くにあった神田区表神保町の借家に転居します。うまくいくはずであった組合は足元から頓挫します。資金を持ち逃げしたものがあり、それを聞きつけた組合の人たちが次々と脱会することが続いたのです。組合は仕事を少しもすることなく消え、もちろん出仕した金は戻ってきませんでした。

それでも諦めないのが則義です。翌一八八九（明治二十二年）三月に則義は神田淡路町に転居して新たに馬車運送の会社を興そうとします。しかし、こちらは借金をしても資本金すら用意できず、おまけに五月には則義が病に倒れてしまいました。

起き上がることもできなくなった則義は病床に真下専之丞の妾腹（しょうかく）の孫である渋谷三郎を呼んで一葉と結婚して樋口家を守ってくれるようにと頼みま

す。渋谷は承諾しました。

七月十二日午後二時、樋口則義は亡くなりまし。享年五十八歳。

ばたばたと一葉は父と長兄を一年半の間に失い、戸主である一葉には兄泉太郎の病氣療養と父の事業失敗による借金だけが残されていました。

父親の葬式後、女性だけ三人の所帯で何の収入もなく借金だけがある樋口家の戸主樋口一葉(夏子)の貧困との闘いが始まります。

【補足】

三宅花圃(田辺龍子)のこと

萩の舎に通う弟子の中で師匠である中島歌子はその才を認めたのは樋口夏子(一葉)、伊東夏子、そして田辺龍子(三宅花圃)の三人です。田辺龍子は一八六七(明治元年)に幕府出身で新政府の中で出世をとげた外交官として元老院議員でもあった田辺太一の娘として本所に生まれ、東京高等女学校に学びました。一葉はこの田辺龍子と萩の塾で出会います。一葉が書き残した田辺龍子の人物評は「風采容姿、清と酒をかね給へる」うえに「学は和漢洋にの三つに」秀でていて「書も和歌も文章も」すばらしい、という具合で高評価でした。

その一方で田辺龍子は一葉との思い出を後年多く書き残しましたが少しばかり

トゲのある内容が多くありました。たとえば次の文です。

歌を作るのは遅い方で、他の人が十首詠む間にようよう一首くらいなもの。練(ぬ)るたちなのでございませ。強いて早く作らせると兎角わからぬ歌ができました。そして洒落などの分からぬ人でちよつと洒落てみましても一向通じないのです。とにかく変わつてみましたね。

「女文豪が活躍の面影」(1908(明治廿一年)月に記す)から

田辺龍子は一葉より五歳年上の姉弟子であり、また、「薺の鶯」で作家デビューし、そのことが一葉に小説家になろうという志を持たせたという自負を持つ龍子には、あとから出てきた一葉が自分とは雲泥の差がある高い文名を得たことへの屈折した思いがこの文には感じられます。他にも「女文豪が活躍の面影」で田辺龍子は一葉が「コックリさん」で人をはめて笑っていたとか「男の兄弟もありましたが厄難(やくき)で勘当された(次兄の虎之助は薩摩焼の絵付師で堅気であった)」とか一葉が住んだ根津の家は「もと銘酒屋をした家だ(一葉は根津に住んだことはない。銘酒屋とは表向きは酒屋のようであるが実は二階などで売春をしていた店をいう。曖昧屋ともいう)」とかいったフェイク情報を多く書き残して

います。さらに田辺龍子は「抜け目のない、気のおけない、まあ下町風」「逆境の人でしたから、妙なひがんだ感情を持つていた」とも書いています。住む世界が違う上の階層からの視線で、しかも嫉妬心も幾分まじえながら一葉を見ていたといえるでしょう。人間の観察といえは大袈裟ですが、興味ある対象の一人です。一葉は田辺龍子自分が与えてくれた恩情(著作の斡旋や単行本化の忠告など)のみを日記に書き残しています。悪口の類いをいっさい日記には書いて残していません。

一八九二(明治二五年)年、田辺龍子は国粹主義を唱道した評論家の三宅雪嶺(三宅雄二郎)と結婚しています。結婚後は高等女学校などの教師をする一方で評論、随筆、和歌の発表を続け、一九四三(昭和十八)年五月、東京都渋谷区の自宅で亡くなりました。

隠された歴史(73)

満田 正賢

今回は二種類の仏教伝来の話をします。一般には、仏教伝来の年次については、五五二年と五三八年の二説があると言われています。五五二年説は、「百済の聖明

王が使者を使わし、仏像や仏典とともに仏教流通の功德を賞賛した上表文を献上した」と日本書紀に記された欽明十三年を仏教伝来の年とする説です。一方、五三八年説は、「百済の聖明王から仏教が伝来した」と『上宮聖徳法王帝説』や『元興寺伽藍并流記資財帳(元興寺縁起)』に記された、「欽明天皇御代の戊午年」に相当する五三八年(日本書紀では宣化三年にあたる)とする説です。

今回私が考察するのは、この通説の議論と全く異なる、倭国への仏教伝来と大和飛鳥への仏教伝来に関する話です。

私は、「隠された歴史(71)」で、「日本書紀の欽明紀は、ほとんど後期九州王朝の史書と百済本記に依存していると考えられる。蘇我馬子が創作した欽明王朝は欽明紀の後の敏達紀において、はじめて実態が記され始めたと考えられる。」と想定し、任那日本府にいた「阿賢移那斯(あけえなし)」、「佐魯麻都(さろま)」について考察しました。今回は欽明紀、敏達紀それぞれの仏教伝来記事を取り上げ、上記の想定が正しいのかどうかを考えてみます。

考察にあたって、私がいままで考察してきた後期九州王朝と欽明王朝の概念について再度説明します。

まず、私が想定した後期九州王朝についてです。私は、日本書紀に描かれた、継体天皇による磐井の乱、安閑天皇によ

る全国屯倉の設置、宣化天皇による那津官家設置の記事は、倭の五王に連なる倭国王朝（前期九州王朝）を近畿勢力の王となつた継体が倒し、倭国王の地位を奪い取つた一連の史実を反映していると考えました。そして、五三六年の宣化による那津官家設置の詔は、新しい倭国王朝が那津官家（場所は博多湾岸の比恵那珂遺跡と思われる）に遷都する準備であつたと考えるとともに、欽明紀以降においては、日本書紀が、新しい倭国王朝（後期九州王朝）が那津官家を拠点として、倭京（大宰府）建設に進んでいったという史実を隠蔽したと考えました。古事記によれば宣化天皇の嫡男は倉之若江王（くらのわかえおう）ですが、日本書紀ではそれが倉稚綾媛（くらわかあやひめ）皇女という名の皇女に置換えられています。日本書紀は、宣化天皇の嫡男の存在を抹殺することによって、後期九州王朝の存在自体を消し去つたと考えます。

次に、私が想定した欽明王朝についてです。欽明紀の大半は百済との交流関係を中心とした朝鮮半島記事が占め、少ない近畿の記事の中では、むしろ蘇我稲目の方が存在感をもっています。欽明天皇自体は幼名も年齢も不詳であり、即位にまつわる記事の中には不可思議な点が多く存在しています。欽明王朝は、蘇我馬子が（日本書紀の記述では聖徳太子とともに）推古二十八年（六二〇）に『天皇記』『国記』『臣連伴造国造百八十部并公

民等本記』を編纂した際に、歴史を粉飾して創作した架空の王朝であると考えました。日本書紀の欽明紀は、ほとんど後期九州王朝の史書と百済本記に依存しており、蘇我馬子が創作した架空の欽明王朝は、欽明の後の敏達期において、はじめて近畿における地方政権として機能するようになり、独自の史書に記され始めたと考えます。蘇我稲目が大臣になつたのは宣化期であり、欽明紀の蘇我稲目の行状は後期九州王朝の臣下としての行状が記されていると考えられます。一方、蘇我馬子が大臣となつたのは敏達期であり、この時期に近畿に残つた勢力の独自の行状が記され始めたと考えられます。

まず、日本書紀の欽明紀と敏達紀に記された仏教伝来の記述を取り上げます。ここでは原本現代語訳日本書紀（山田宗睦訳）を使用しました。

① 欽明六年秋九月。

この月、百済が「立てば」丈六の仏像を造つた。願文を製つて、「思うに、丈六の仏を造る功德ははなはだ大きいと聞く。いまうやうやくしく造つた。この功德によつて、願わくは、天皇がすぐれて善い徳をえて、天皇の用いる彌移居（みやけ）「官家」の国「百済」任那（*）日本古典文学大系日本書紀も同様の解釈をとる」が、「天皇」とともに福祐（さいわい）をこうむるように。また願わくは、天の下の一切衆生がみな解脱を

こうむるように。このゆえに造る」といった。

② 欽明十三年冬十月。

百済の聖明王（更の名は聖王。）が西部姫氏の達率（だちそち）怒唎斯到契（ぬりしちけい）らを遣わせて、釈迦仏の金剛の像を一体、幡と蓋とを若干、経と論とを若干巻、献「上」した。別に表で「仏教を」流布し礼拝する功德を讃えて、「この法は諸法の中で、もっともすぐれています。「理」解するのがむづかしく、「教」に入るのもむづかしいです。（中略）こういうわけで、百済王である臣の明は、つつしんで陪臣の怒唎斯到契を遣わし、帝の国「日本」に伝え奉ります。畿内「日本」に「仏法を」流布いたします。仏がわが法は東に流「布」する。と記したところを果たすのです」といった。この日、天皇は聞きおわつて、歡喜（よろこん）んで踊躍（おどりあ）がり、使者に詔して、「朕は、昔からずっと、このように微妙な法を聞いたことがない。しかし朕は自分できめることはしない」といった。（中略）（A）

蘇我大臣稲目宿禰が奏して、「西蕃の諸国は、ひとしくみな礼「拜」しています。豊秋日本だけが、どうしてしたかわないでいられますようか」といった。（B）物部大連尾興、中臣連鎌子が、同じく奏して、「（中略）まさにいま改めて蕃神を拝したりするなら、おそらくは、国神の怒をまねくでしょう」といった。

天皇は「よろしく心願の人稲目宿禰にさずけて、試みに礼拝させるがよい」といった。大臣は、ひざまずいて受け

てよろこび、小墾田の家に安置した。ねんごろに仏道を修め、それで向原の家を喜捨して寺「豊浦寺」とした。（C）のちに国に病気が「流」行し、民はたちまちに死んだ。日時がたつほどにいよいよふえた。治療などできなかった。

物部大連尾興、中臣連鎌子らは、同じく奏して、「先日、臣の方策をもちいざ、この病死をまねきました。いまそれほど時のたたぬうちに「旧」に「復」したならかならずまさに慶「賀」すべきことがあるでしょう。よろしく早く「仏像を」投げ棄てて、ねんごろに後の福を求めべきです」といった。天皇は、「奏のとおり」といった。（D）有司は、仏像を難波の堀江に流し棄てた。また伽藍「寺」に火を放つた。焼きつくしてなにも残らなかつた。このとき、天に風も雲もなく、たちまち大殿「天皇の宮」に火災があつた。

③ 欽明十四年夏（五月）。

一日河内の国が「泉郡の茅渟の海」和泉灘の中に、仏教の楽音がします。その響は雷の音のようです。光彩が照り輝いて陽光のようです」といった。（*注）天皇は、心にあやししみ、溝辺直（いけへのあた）い（ここにただ直といって、名字を書かないのは、たぶん転写して誤り失つたのだろう。）を遣わし

て、海に入って求めさせた。この時、

溝辺直は、海に入って、はたして樟の木が、海に浮かんで照り輝いているのを見つけた。とうとう「採」取して天皇に献「上」した。画工に命じ、仏像二体を造った。いま吉野寺「吉野郡大淀町世尊寺の地」に光を放っている樟の像である。

*日本古典文学大系日本書紀注・靈異記には蘇我馬子が氷田に三尊像を造らせて豊浦堂に安置したとある。

④ 敏達十三年秋九月。

百濟から来た鹿深臣（名字を欠く。）が、彌勒の石像を一軀、もってきた。佐伯連（名字を欠く。）が仏像を一軀、もってきた。この歳、蘇我馬子宿禰は、

その仏像二軀を請い、鞍部村主の司馬達等、池辺直の氷田を遣つて、四方に使用して、修行者をたずねもとめた。このとき、ただ播磨「兵庫県」の国でだけ、僧の還俗した者を「さがし」えた。名は高麗の恵便。大臣はこれを師とした。司馬達等の娘の島を「得」度させた。善信尼という。（年、11歳。）また善信尼の弟子二人を「得」度させた。（中略）（A）馬子はひとり仏法に「帰」依し三尼を崇敬した。

（中略）仏殿を宅の東方に経営し、彌勒の石像を安置した。（中略）馬子宿禰はまた、石川「橿原市石川町」の宅に仏殿を修治った。仏法の初めは、ここからおこったのである。

⑤ 敏達十四年二月。

（B）一日物部弓削守屋大連と中臣勝海太夫とが、奏して、「なぜ臣の言を用いるのを許さないのですか。考「父」天皇「欽明」から、陛下に及んで、（C）疫病が流行し、国民が絶えてしまします。もつぱら蘇我臣が仏法を興行したのによるのではないのでしょうか」といった。詔して、「まつたくあきらかだ。仏法を断つがよい」といった。三十日、物部守屋大連は、自身で寺に出かけ、胡坐に腰かけて居た。その塔を切り倒して、火を放つて焼いた。（D）仏像と仏殿をともに焼いた。そのうえ焼いた以外の仏像をとつて、難波の堀江に棄てさせた。（中略）

欽明十三年冬十月の記事と敏達十三年秋九月及び十四年三月の記事を比較して見てください。記事の中に（A）、（B）、（C）、（D）という記号を付けた文面があります。（A）の文面は蘇我氏の仏像崇拜に関する事、（B）の文面は物部氏、中臣氏が異議を唱えたということ、（C）の文面は蘇我氏の仏教崇拜によって災いが起きたと物部氏、中臣氏が主張したこと、（D）の文面は仏殿を燃やし仏像を難波の堀江に棄てたこと、を記しています。いずれの文面も非常に酷似しています。蘇我稲目を蘇我馬子に、物部尾輿を物部守屋に、中臣鎌子を中臣勝海に、いづれも登場人物を置き換えてみるとその類似性がわかります。

性がわかります。

日本古典文学大系日本書紀は、敏達十三年三月記事に「以下の破仏の記事は欽明十三年十月条と同一説話の反復か。元興寺縁起には『他田天皇欲破仏法（中略）』とあって、敏達天皇の発意としている。」という注釈をつけています。この注釈のとおり、同一の元資料を模倣したものと考えてよいのではないのでしょうか。

この同一の元資料については、元資料に記された出来事が、欽明期の出来事か敏達期の出来事かによって、歴史の読み取り方が大きく異なってきます。今回は、この点を深めていきます。

俳句

影山 武司

泣きべそもピースサインも運動会
山の音風の音聴く吾亦紅
水底に光を鎮め秋澄めり
柿渋の染め糸を干す山の軒
秋天の青の深みへ古都の塔
下馬札の残りし鳥居天高し
露寒や硯の肌の黒深み
金堂の屋根反りかへり鱗雲
秋うらら都大路へ牛車の音
長き夜の筆走りたる静寂かな

編集後記

SK生

▼日本の総選挙も米国の大統領選挙も終わった。日本の総選挙は自公の少数与党化、立憲民主と国民民主の躍進、参政党・日本保守党というごく最近できた政党の議席獲得など話題の多い選挙結果であった。この結果が国民の願いをかなえるかどうかは、まだ分からぬ。また、米国の大統領選挙では共和党の思わぬ大勝利となり米国の政治が「トランプ・ファースト」となっていくことに世界の多くの人が頭をかかえたのではないか。日本と米国の、いずれの選挙結果も明るい未来をそれぞれ国民にもたらすかどうかはまったくの闇の中だ。▼今月の祖蔵哲氏の記事「ポリクラシスの哲学」には「複合危機」が語られている。「陰謀論」に「確証バイアス」そして「ニューロテクノロジー」。知らず知らずに管理され一つの方向に誘導される私たち。それでなくともはつきりしないこれからの世界を生きていかねばならない私たちはよほどしっかりとせねば生き抜いていけぬらしい。

何気なく思ったことで一句詠む

○死ぬことも忘れて母は白寿越え

六十を前に妻とそろって早期退職した。妻の母と一緒に暮らしながら介護する生活が足掛け九年続いた。母は百二歳で逝ったが、九十五歳を越えて肺炎で三か月ほど入院したことがある。効果のある抗生剤がなかなか見つからず発熱が続いて食事がとれないので、点滴で栄養補給した。胃ろうの処置は断った。みるみる体力が落ちてゆくのがわかったが、やっと見つかった抗生剤のおかげで熱も下がり少しずつ食事のとれるようになった。不思議なもので、点滴の方が栄養が摂れるのではなにかと思うような食事でも、食べることで力が湧いて来たように見えた。ベッドの上でのことだが足を折り曲げたり伸ばしたりのリハビリのようなことも始まった。

その前後、主治医と面談した時のことが忘れられない。母が少しずつ回復の気配を見せて来たので、「退院したら、気をつけなければならぬことは何でしょうか」と、うっかり訪ねた。それを「病院の面倒見が悪いのもう退院させる」と勘違いしたのだろうか、五十台の童顔の男性医師は血相を変えて

言ったものである。「お母さんの面倒はきちんと看ていますよ。九十を越えて肺炎になって、治るとか退院できるとか思っているんですか。九十越えて肺炎になったら、あとは死ぬだけです」

— その言葉を、同席した看護師も私たちも呆然と聞いていた。

にもかかわらず、母はどんどん回復し、食事もし、リハビリを兼ねて歩行器を使って院内を歩き始めた。三か月後の退院の時に、彼の医師は言ったものである。「奇跡です。こんな人を見たことはありません」

医師も看護師も本当によく見てくれた。母の認知症はよくならなかったが、体力は信じられないほど回復した。「生きることは食えることです腹の虫」という誰かの川柳を地で行くような母の回復であった。

マンションに帰って、毎日のようにダイサービスに通う母を見て近所の人には「いつまでもお元気ですねえ」と感心した。笑いながら、姉が言ったものである。「死ぬことを忘れてるんです」
— 表題はそれを思い出しての句。

○一平米五百ワットの日の光

地球の環境を保つうえで、特に生物にとって太陽の存在は不可欠である。太陽が宇宙に放射する全エネルギーの

二十二億分の一が地球に届くが、それは地上での仕事率で表すと一平米当たりおよそ五百ワット（五百ジュール／秒）になる。真夏日の暑さが分かるというものであり、冬の日向ぼつこの有難みも知れるというものである。

このエネルギーを光合成によって植物は生きる力に変えている。人間はようやく太陽光エネルギーを太陽電池によって電気エネルギーに変えそれを利用して蓄電することができるようになってきたが、芋はとっくの昔から太陽光を芋という塊にして貯蔵しているのだ。人間はその芋を食う。

太陽の塊として芋を食う芋だけではない、野菜も果物も植物はみな太陽光の塊である。だから、植物を食う動物もまた、動物を食う人間もまた、言ってみれば太陽の塊だ。命はみな、「一平米五百ワットの日の光」が支えている。

○空の上こんなに水があったのか

今夏は温暖化による気温上昇の上「一平米五百ワットの日の光」が加わり、飛んでもない酷暑となった。気候変動も激しく、因果は巡りめぐって猛烈な雨も降った。大は「五月雨を集めて早し最上川」をはじめ、全国のあちからこちらで名も知らなかった川が氾濫

した。止むことを知らぬ気に降り続く雨を見ながらの実感である。

○花も実も根も葉も水の美しさ

「菊人形命は水の美しさ」——これは松山の川柳人であった前田伍健の句である。菊人形を見ることもなくなってしまうが、我が家の庭に桃が実ったとき思ったのは、「桃熟れて命は水の美しさ」であった。そしてまた、花であろうと実であろうと、人間であろうと、「花も実も根も葉も水の美しさ」と思ったものであった。



肥後菊